



伊
2702
2400
卷 3

是

是
心
出

念
好
卷

是
心
出



福德過報喇卷之三

目錄

佛師心四布在法門

福徳過報略卷之三

佛師山田有長門

岩小立矢とつり松浦依を賜ハ石ある我
 高智法下ハ乾物とす。れ多。其昔の物
 諸下野と上野との間ハ弘心も併師心友
 中弘法大師の地有り。そ石弘の佛縁あり
 其。極難之。里布と隔く。伊勢大橋つと云人。其
 力。是も。揚多。く。百姓耕。化。せ。く。多。く。多。く。石。は
 者出入。する。者。た。と。力。強。く。弱。く。と。見。せ。く。ハ

右の如くある左四右の如くは別勢なる事の
終るまじく小依くい法とす盗賊の改の
小ありても下の悪党どもも大格人といひ
或はた仏山のありて小四右の如くも下の老を
かゝるひ七八人連く通るまじくもや夜と
成の時にもなるまじく。後僧六人連て通る
も下の牛太右の如く馬太右の如くも
ユリヤク坊どももけ往來を通るかゝる是れ
でみまひの如くも家小赤く裸く通る守

代家小路合を有べしといふ上人の僧はは
して。是れは法免下海せやうくと方々
しく通る者どもも。海と云くは四右
右の如くハ少小も。小腰打け双方のせり
ふをせり。居る悪党ども皆く大眼指を
首小付く。重くは。と云くは。な。か。ま。い。わ。い。と
ぶつ。も。ま。せ。と。ま。か。る。も。射。増。納。く。も。色。を。見。た
の。い。も。中。ま。ん。と。天。及。と。信。を。我。色。く。け。ま。我
の。は。さ。り。く。て。盗。賊。の。も。小。赤。く。死。と。天

乃大目如来と申す新親とて梅枝く
六人の院を食の修行として十三年い
夜倫言及戴のため京都へ参りやとて
た能く受け。仙院を以てりさば馬の身ふ
同しくやを御つるまひたふ一紙す職
のんぎと清くこゝろ病字本振の親ひ
安産の親子供うを國へ行便りがるい親
り長病公事六ヶ敷の海やみ程く極くの
人々の新親を人の坊ふ三千人のんぎ

と背中ふ有^うく坊の中ふもひ月の物ひとと
坊ふの母親の目ぐ久忍何とぞは夜は倫言
以戴供くふち一ヶ敷の位おとるふと母親
と書ひなとの親ひ九歳の時より親つれ
入當年武指を也。物ひととめと人を殺
しなびを方八人のんぎ一親親と殺害を
あつらふものへ何とて方どもの子供が出
せと何と人が坊けたらべいいうやどの眼と
ふくむべしは歩入がらくばんやくそと

よと居だけきふなりておしる。伊那左衛門
路次を少爺くコリヤく皆の者どもこの城
をを通しそや坊主が思かした事を少爺
たごらるれども坊主どもを人あふ三指
と見く百八指まの命をいり倫名いそ
おつく入院志あつて時ふ切殺してさるべ
いづ通せそくゆりくる。人の傍ハ虎の
はとれうきたらん此してをあそ通うしが
まよりいそだく及の七八里と来はくと

思ふに夜ハ木のくとも小系。向ふの松系小
二玉のやふを男大カとさしてまらこかほく
おり。白人をさうするい又夜あの中をう
たのめいりしひのいりまか。物やと別カて
と白人とまんと申したぐひふさやまら通る
彼大男をさうけ白人と小系をよ松若ハ
伊那左衛門とやものこも信連ハ倫名ハ裁
小系ハ内のおりと承りながくの及中いん
をの候あへ入。及中死のやふとのがみら



道の二里三里松原のふたりのつるぶのあ
の宿ぐハ同屋へかほく馬とうま馬三足も
まゝもふあぐべ〜 湯と馬士まごハ酒代を
くまよら馬士とバヤたらふるよ結髪を
かたと同屋をたぐくまま馬士たのむべし
曉方七つまふまぢ〜 夜ぬく宿とま
べ〜 夕方ふと成な〜 七つ時ハ泊るべ〜
相宿ハを用く宿のま中住を宿け〜 宿
ハま〜 とも宿と同利〜 てもありあも宿の

しほふ泊るま〜 と念ひふ〜 藤田京
の又たあが宇治川の先原を下知とまやふ
あへ懐中〜 今様あ〜 して先ハ中馬
駕籠のたらんふぢま〜 とも人へ〜 毎
京都を尾よく〜 してりり時ハ十人よりハ十
人怪をほ〜 成梅〜 とも夜た〜 とも
交〜 とも別〜 とも六人の
僧傳ハ昆沙門天の山昔〜 伊弉諾つらたを
あ〜 とも京都へや〜 とも後南都

興福寺の傍に天と云し、が字を文とせれば
 近座より経を讀み、以て痛し、てわくびぬる
 程、天を思ふ、痛^{ちやく}高角^{たかく}の身となり、わ
 小痛身で、ハ行し、もぬふまど、は、ハ不動^{ふどう}を
 祈^{いの}り、して安んず、極むべし。人考るるも
 の、七座の儀、摩をた、く、行る、七日月の
 夏中、ふ、昔の法、く、之、只、併、原、山、に、あ、た、は、つ、め
 へ、わ、べ、し、と、し、程、天、の、静、ふ、旅、の、ま、な、ど、し、て
 五里、の、り、と、し、ハ、泊、り、七里、は、く、ハ、宿、と、し、り、日

教をまゝ、縁く、仏、師、心、を、お、た、ど、り、付、ま、さ、し、ら
 伊、知、た、清、つ、及、し、り、人、が、こ、ご、ら、か、し、る、ま、じ、バ、程、天、が
 教、を、ま、じ、め、あ、る、る、に、あ、め、く、は、ま、る、の、ま、な、ど、し、て、
 伊、知、た、清、つ、及、め、ま、し、な、ご、ら、く、し、と、し、ま、し、り、
 伊、大、所、と、し、ご、ら、が、其、伊、知、た、清、つ、ハ、思、堂、の、ひ、め、く
 法、務、共、ご、ご、ら、の、り、ど、し、と、し、ま、し、る、
 が、よ、い、と、云、程、天、の、前、の、告、る、れ、ハ、た、し、ら、い、ら、る、
 極、ふ、あ、る、も、あ、ら、べ、し、と、し、れ、ま、く、ま、し、ら、と、し、
 くだ、り、し、て、お、ま、り、伊、知、た、清、つ、の、宅、入、る、の

付くま國へ立向ひたるのこまきこと云。此
 と見へくさふなりの大男出向ひ何の由
 ぞ少祖天や多家の批信の南朝より来ひて
 信の辰の辰目不知りたは子や後養あり
 け有来と致してうたふことなしく
 多れば五次の者何れ信つへは疑致し
 何れ信つてさく何れなりと知り
 かくし何れを病も久た人足でもす
 客の因へ通へ湯漬でもやして疑の事

外を休ませよと云付る。まうに
 遊くことにて何れ信つてさく何れなりと
 何れ信つてさく何れなりと知り
 用事にて出出たてぬ。祖天や多家の
 採へむかりたは信く来り何れなりと
 已ませ思つて何れ信つてさく何れなりと
 けむること云。祖天や多家の批信の南朝
 身は不動き宿願の候ども物清しと
 若くはく来り何れ信つてさく何れなりと

海に渡らるる云々伊弉諾の御子と云々拙者候も
 のとの又六指人を百孝ひ安心雨づくらう屋
 思ふべきとを治出の條でうなむとバ四又日
 と逗留して伊弉諾も必し御子と云々
 容態して又さうして夜世の刻をかくふ能
 史と持大根指とがつ込祖天の痛く居る處
 風のかうう御坊くと呼ぶ祖天の夜もも海
 くふ海くねど業とて斗居るハ南を三寶
 是ハ弁殺さるる事と思ひくくはらと云々か

起く立出る伊弉諾の御子と云々拙者候も
 く西出と云。祖天の御子不動明王と云々伊弉
 海つふれく行三所をく行と云々大行の
 教りう門の候と云々又入書接と持て
 候と云々又云所をく行門と云々右
 の通ふ海してむくふ云々候と云々又云
 弟と云々して能くと云々
 見せられぬ去程の法儀と云々仏だんハ武間候
 ありハ今徳様御子と云々

陀のさる像をいふた清の仏だんの下を指し
八九寸のたこが糸をぬき出して祖天不見堂
小塔を本とすりてすりおとすり祖天
勢をたぐひぬむやうた清の六下人どもは皆
悉くいひまじりてのこよひをせしむるハ今より
著されど是非ふ及らばと悪堂をとり下ふは
しておまじりて七八面の伏紙を指おくと
ハ考をまじりて一むふ仏の御名を号へてす
思ひことものぐりけり安んじハ一人どもは

病身ありハ森とく指くとは彼御名号を唱へ
万事ん度ふとめく変定してまじりぬるお
の候ハまじりてえの通りおしと祖天を
えのふへ森をせまより二三つをめ密に小塔
合をくまじり南都へ神くろりぬふ内んの家
のほりりし者今ふ子孫はむく業へり
とく

福徳追報喇卷之三終

